

第1

まちづくりの歩み

当市には、是川遺跡に代表される縄文時代の遺跡が数多く残されており、古くから人々の生活が営まれていたことが分かります。また、国内に類をみない「獅嚙式三累環頭大刀柄頭」が出土した丹後平古墳群に代表される奈良・平安時代の遺跡も数多くみられますが、その時代、当地方はまだ古代律令国家の勢力外の地だったと考えられています。

建武元年（1334年）、甲斐の国（現在の山梨県）の南部師行が根城に城を構えたと伝えられ、それ以降南部氏が戦乱の北東北を鎮め、5代にわたって南朝に尽くし、当地方の基礎を築きました。その後、三戸南部が台頭、居城を今の盛岡に移し、根城南部は、その支配を受けるようになりました。寛永4年（1627年）には盛岡の南部利直の命により根城の地を離れ、今の岩手県遠野市に国替えになりました。

寛文4年（1664年）、盛岡藩主南部重直は後継ぎを決めずに死去したため、幕府は弟重信に盛岡8万石、次弟直房に八戸2万石を分け与えました。ここに八戸藩が誕生し、八戸発展の新たな出発点となりました。

明治に入り、当地方にも近代化の波が押し寄せてきました。明治22年（1889年）、町村制により八戸町となり、同24年（1891年）には東北本線が開通し、現在の八戸駅が設けられました。

また、明治末から大正初期にかけて漁船の動力化とそ

れにともなう漁船の大型化により、漁港の修築運動が盛り上がり、大正8年（1919年）には鮫浦漁港の修築に着手しました。

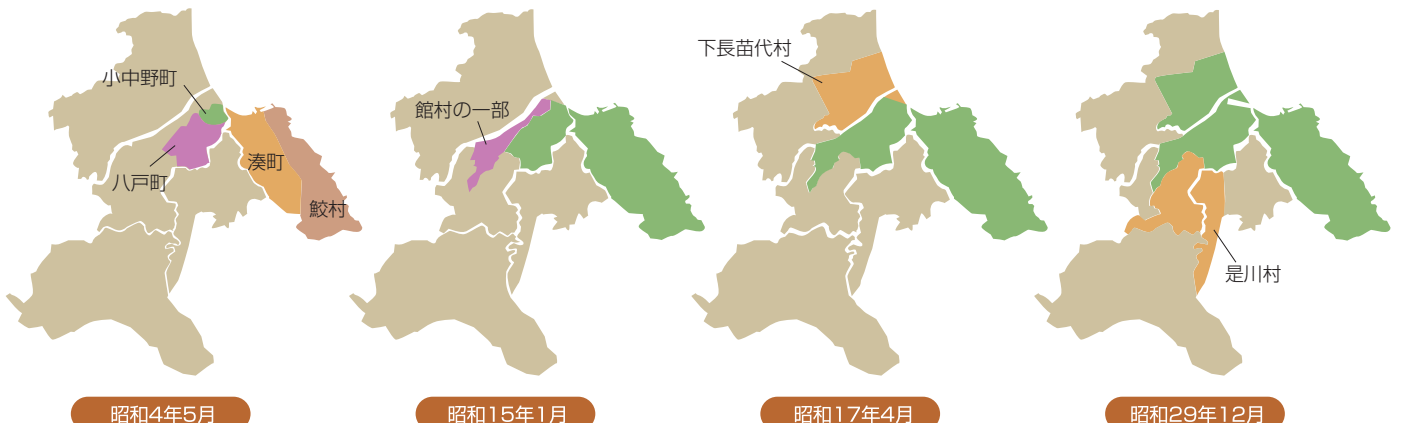
同年にはセメント工場が立地したのをはじめ、昭和に入ってから、化学、砂鉄などの各種工場が立地し、戦前の工業の基礎が築かれました。

昭和4年（1929年）、八戸町、小中野町、湊町および鮫村が合併し、人口約5万2千人の八戸市が誕生しました。その後、昭和29年（1954年）から昭和33年（1958年）にかけての近隣町村との合併や、平成17年（2005年）の南郷村との合併を経て、現在、人口約25万人の北東北の中核都市に成長しています。

「八戸は海から拓け、海とともに発展してきた」といわれるように、江戸時代から交易の拠点として栄えた八戸港は、昭和10年代にかけて、漁港および商港の近代化が進められ、昭和14年（1939年）に開港指定、昭和26年（1951年）に重要港湾に指定され、港の整備に拍車がかかりました。その後、昭和39年（1964年）の新産業都市の指定などにより、八太郎地区や河原木地区で港湾整備が進められ、八戸港の港湾貨物取扱量は東北地方でトップクラスとなっています。

さらに平成6年（1994年）には、東北初の国際コンテナ定期航路となる東南アジア航路が開設されました。その後、輸送網の拡充が進められ、現在は、東南アジア航

八戸市域の変遷



※内航フィーダー航路

外国とのコンテナ航路を有する日本国内の主要港湾に接続する国内コンテナ輸送航路。

※特定第三種漁港

漁港漁場整備法で指定された漁港で、全国の漁船を受け入れるような施設がある重要な漁港。全国では八戸漁港を含む13漁港が指定されている。

総合静脈物流拠点港（リサイクルポート）

国から指定を受け、広域的な静脈物流ネットワークの拠点となる港湾。

路、中国・韓国航路、北米航路、横浜港および東京港との内航フィーダー航路などのコンテナ航路を有しています。

昭和35年（1960年）、特定第三種漁港に指定されたのを契機に、魚市場の整備や背後施設の建設など、水産都市としての基盤整備が進められ、過去6度、水揚げ量日本一を記録しています。現在、水産資源の減少や国際的な漁業規制により、水揚げ量は減少傾向にあるものの、依然として数量、金額ともに全国上位となっています。

地域の食料供給を担う農業については、野菜、花き、果樹、畜産など、地域特性を生かした多様な生産が展開されています。なかでも、南郷区のソバやブルーベリー、市川地区のハウス栽培のイチゴなどは地域の特産となっているほか、畜産は臨海部の大規模な飼料コンビナートを背景に、当市の農林畜産業粗生産額の約6割を占める重要産業となっています。

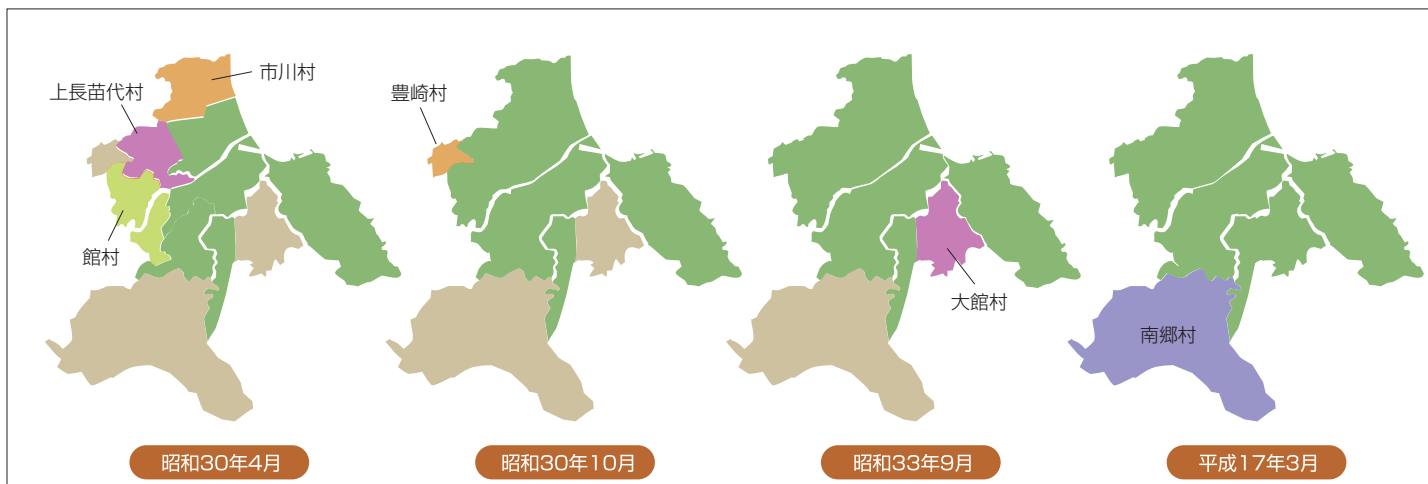
一方、昭和39年（1964年）の新産業都市の指定を契機に、第二工業港の建設、第二臨海工業地帯や工業用水道、産業道路の整備など、産業基盤の強化が図られ、紙・パルプ、非鉄金属、鉄鋼、食料品等を中心に、臨海型・基礎素材型産業の集積が進みました。さらに、平成元年（1989年）の頭脳立地法の指定などにより、八戸ハイテクパークとその中核施設である八戸インテリジェントプラザが整備され、青森県工業総合研究センター八戸地域

技術研究所とともに、地域産業の高度化・高付加価値化が進められています。また、隣接の八戸北インター工業団地には、賃貸型工場「テクノフロンティア八戸」も整備され、技術の高度化、新製品の開発、新分野への進出等を促進しています。

近年では相次いで、当市を含む地域が、あおりエコタウンプランの承認、総合静脈物流拠点港（リサイクルポート）の指定、および環境・エネルギー産業創造特区の認定を受けています。臨海部に集積している基礎素材型産業の技術を生かしたリサイクル関連事業の促進や、新エネルギー関連事業の推進などにより、地域産業の活性化を目指しています。

当市には、首都圏と直結する東北縦貫自動車道八戸線や、本州と北海道を結ぶフェリーが就航する八戸港、札幌、東京および大阪を結ぶ三沢（八戸）空港など、陸・海・空の交通結節点が整備されています。さらに、平成14年（2002年）、東北新幹線盛岡・八戸間の開業により、本格的な高速交通時代に突入しました。

県内最多の商圏人口約67万人を擁する当市は、古く藩政時代に築かれた中心市街地を中心に、青森県南および岩手県北における広域商業を担ってきています。今日では、ロードサイド型の大型店舗や郊外型のショッピングセンターの立地など、商業施設の郊外への分散が進む一方、中心市街地の商業機能の低下が顕著となっており、



※市街化区域

都市計画法にもとづく都市計画区域のうち、市街地として積極的に開発・整備する区域で、既に市街地を形成している区域およびおおむね10年以内に優先的かつ計画的に市街化を図るべき区域として都市計画で定められた区域。

※NPO法人

不特定多数の利益となる活動を主な目的として、特定非営利活動促進法にもとづき設立された法人。NPO法人という略称は、同法が、一般的にNPO法と呼ばれていることに由来している。

※中核都市

人口規模が20万～60万人程度の地方の中核をなす都市。県庁所在都市のほか、人口規模などの面でこれらに相当する都市も含まれる。

中心市街地の再生が大きな課題となっています。

こうした産業の振興とあわせて、市民の日常生活を支える道路、公園、上下水道など、生活基盤の整備が着々と進められています。また、土地地区画整理事業が市街化区域の約34%で実施されるなど、快適でうるおいのある居住環境の整備を推進しています。あわせて、恵まれた自然環境の保全、新エネルギー・省エネルギーの促進、災害の防止や防犯対策など、安らぎのある安全なまちづくりを進めています。

また、健康づくりの推進、子育て支援の充実、高齢者・障害者の生きがいづくりなど、男女の区別を問わず、すべての市民が、住み慣れた家庭や地域社会のなかで、生きがいを持って安心して暮らせる地域福祉の充実に努めています。

近年では、平成14年（2002年）に開設された八戸市民活動サポートセンターなどを舞台に草の根の市民活動が活発化しており、約160団体が同センターに登録し、また、市内の33団体（平成18年4月1日現在）がNPO法人の認証を受けています。

当市には、是川遺跡、丹後平古墳群など、学術的に重要な国指定史跡があり、また、国の重要無形民俗文化財に指定されている八戸三社大祭や八戸えんぶりのほか、国宝の「赤糸威鎧兜大袖付」・「白糸威褌取鎧兜大袖付」や「日本100名城」に選ばれた中世の城・根城など、後

世に伝え残すべき歴史的・文化的財産が多数存在します。そして、市民の芸術・文化に対する関心は高く、音楽や演劇をはじめとした芸術・文化活動が盛んに行われています。また、市民のスポーツに対する関心も高く、体力・健康づくりから競技スポーツまで、スケート、アイスホッケーをはじめ、各種スポーツが盛んに行われています。

また、八戸工業大学、八戸大学および八戸工業高等専門学校といった学術研究機関があり、人材育成機関および研究開発の拠点として、高等教育の提供と地域産業の高度化に寄与しています。

当市では、南部藩時代の歴史的つながりなどを大切に、北奥羽開発促進協議会、三陸沿岸都市会議、南部首長会議、戸のサミット会議など、地域間・都市間の交流・連携を進めています。

さらに、平成5年（1993年）に姉妹都市提携を結んだアメリカのワシントン州フェデラルウェイ市や、中国の蘭州市などの海外友好都市等との間で、教育・文化、産業・経済などの様々な分野での交流を進めています。

このように、当市は、古代から脈々と続く歴史・文化を受け継ぎながら、北東北の中核都市として発展しています。



櫛引八幡宮国宝館



赤糸威鎧兜大袖付（国宝）



白糸威褌取鎧兜大袖付（国宝）